ヴェルコール

# 海の沈默・星への歩み

河野與一
加藤周一 譯

LE SILENCE DE LA MER
LA MARCHE A L'ETOIRE
PAR VERCORS

IWANAMI GENDAI SOSHO

岩波現代叢書

ヴェルコール

# 海の沈默・星への歩み

河野與一
加藤周一 譯

岩波現代叢書

海の沈默・星への歩み

1951年4月10日　印　　刷
1951年4月15日　第1刷發行

〒140

譯　者　河野與一
　　加藤周一

東京都千代田區神田一ツ橋2ノ3
發行者　岩波雄二郎

東京都板橋區板橋町10丁目2484
印刷者　白井知一

發行所　東京都千代田區神田一ツ橋2ノ3　株式會社　岩波書店

落丁本・亂丁本はお取替いたします　三陽社印刷・松岳舍青木製本

海の沈默……河野與一譯……1
星への歩み……加藤周一譯……65
解說……加藤周一

# 海の沈默

直話

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

暗殺された詩人

サン・ポル・ルーの思い出に

先觸れに來たのは兵器の物々しい行進であった。まず二人の歩兵、二人とも淡いブロンドの髪をしていて、一人はひょろひょろとしていて痩せていたし、もう一人は四角ばっていて石屋の手をしていた。二人は家を眺めただけで入らなかった。そのあとへ一人の下士官がやってきた。ひょろひょろした方の歩兵がそれについてきた。この人たちが私にフランス語のつもりで、何か物を言った。それが一言もわからなかった。それでも私は空いている部屋を見せてやった。二人は満足そうな顔をした。

翌る朝、軍用のトルペド（無蓋の自動車）が、鼠色に塗った大きな奴が、庭の中まで入ってきた。運轉手とそれからブロンドの毛をして細いにこにこした若い兵隊が二つ

の箱を樹でも倒すように轉がし、次に鼠色の布で卷いた大きな梱包を下ろした。そしてそれを全部一番廣い部屋に持ち上げた。トルペドが行ってしまってから、數時間たつと騎馬の音を聞いた。騎兵が三人現われた。一人は馬から下りて古い石の建物を檢分しに行った。それが戻って來ると、皆、人も馬も、私が仕事場に使っている納屋に入って行った。あとで見ると、この人たちは、私の仕事臺で物を押えるのに使っていた先の曲がった鐵の棒を拔いて行って、壁の孔の二つの石の間に打ちこみ、それに綱を結んで、その綱に馬をつないだ。

二日の間、何ごとも起らなかった。人はだれも來なかった。騎兵たちは朝早く馬で出掛けて、晩には戻って來る。寢るのは天井に近い板の間に敷いた藁の中である。

すると、三日目の朝、あの大きなトルペドが又やって來た。にこにこしている若い兵隊が嵩ばった軍用行李を擔いで部屋へ持って行った。それから行囊を取り出して次の間に置いた。それが下に降りてきて、私の姪に正確なフランス語で話しかけて、シーツをくれと云った。

だれか扉をノックしたので、姪が開けに行った。その時も毎晩のように、私にコーヒーを持って來たところであった。(私はコーヒーを飲むと却って眠れるのである)。私は部屋の奥の、どっちかというと暗い所に腰をかけていた。扉は庭に出られるようになっていて階段はない。家に沿って赤いタイルを張った道がずっと附いていて、雨の時に都合がよかった。われわれは人が來る音を、タイルの上に踵が響いたのを聞いた。姪は私を見て、自分の茶碗を置いた。私は茶碗を持ったままでいた。

眞暗だったが、そう寒くはない。その十一月はそう寒くなかった。眼に入ったのは大きな影繪、平たい帽子、ケープのように肩にひっかけた防水外套である。

姪は戸を開けたまま、默って立っていた。扉を開けて壁におしつけ、自分は壁に凭れて、何を見ているということもなかった。私はコーヒーを少しずつ飲んでいた。

將校は戸口で云った。《御免下さい。》頭でちょっと會釋した。沈默の間を測っている樣子があった。そして入って來た。

ケープは腕まですべって來た。將校は軍隊的な敬禮をしてから帽子を脫いだ。姪の方を向いて、つつましやかにほほえみ、ごく僅か上體を傾けた。それから今度は私と向き合って、もっと丁寧にお辭儀をした。《ヴェルネル・フォン・エブレナクと申します。》私はごく短い間に考えた。——この名前はドイツのではないな。プロテスタントの亡命者の子孫かな。——すると、向うでは言葉をついで云った。《お氣の毒に思います。》この最後の言葉はひっぱるように發音されたが沈默の中に消えて行った。姪は扉を閉じた後も、壁によりかかって眞直ぐ前を見ていた。私は立ち上りもしなかった。空になった私の茶碗をゆっくりとオルガンの上に置いてから、手を組んで待っていた。將校はまた話し出した。《どうも止むを得なかったのです。できれば、こうしないで置きたかったのです。從卒が何もかも致しますから御安心なさって下さい。》

將校は部屋の眞中に立っていた。丈が高くて非常に細かった。手を擧げれば、梁に屆いたであろう。

頭はちょっと前に傾いていて、頸が肩の上に据えられずに胸の始まる所に附いているようになっていた。猫背ではなかったが、まるでそういう風に見えた。その幅の狹い腰と肩とは强い印象を與えた。顏立ちは立派であった。男らしくて、頰に沿った深い凹みが目立っている。眼は眉骨のつくる蔭に隱されて、眼まで見えなかった。私にはその眼の色は明るいように思われた。髮の毛がブロンドで柔らかく、後へかき上げられ、シャンデリアの光を浴びて、絹のような光澤をしている。

沈默が長く續く。それは朝は靄のようにだんだん濃くなって行った。濃くなって動かないのだ。姪も動かずにいる。私ももちろん動かずにいる。それがその沈默を重くした。鉛のようにした。將校はとまどって動かずにいたが、しまいに私はその唇に微笑が浮んで來るのを認めた。その微笑はまじめでアイロニーの影が少しもない。ちょっと或る手つきをしたが、その意味が私にはのみこめなかった。その眼は姪に注がれた。姪は相變らず、剛ばって眞直ぐになっている。そこで私はゆるゆると相手の力强



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

いプロフィル、くっきりとして筋の通った鼻を眺めることができた。半ば閉じた唇の間に金歯が一本光っている。やっと眼をそらして、今度は煖爐の火を見て云った。《祖國を愛する人々には非常な尊敬を感じます。》突然、顏をあげたかと思うと、窓の上にある天使の彫刻に眼を注いだ。《では、二階の室へ參りましょう。どっちから行くのですか。》姪は小さい階段に向う扉を開けて、段を登り始めたが、將校には一目もくれず、まるで獨りで行くようであった。將校はそのあとに隨いて行った。その時、私は一方の足が曲らないのに氣附いた。

控の間を二人で通って行くのが聞える。廊下に響くドイツ人の足音は交互に强かったり、弱かったりしている。扉が開いた。それから閉まった。姪が戻って來た。自分の茶碗を取り上げて、コーヒーを飲み續けている。私はパイプに火を點けた。二人とも何分か默ったままでいた。私は云った。《まあよかった。よさそうな人だ。》姪は肩をすくめた。膝の上に私のビロードのチョッキを引きよせて縫いかけて友ぎれを附け終った。

翌る朝、將校が降りて來た時には、われわれは臺所で朝食を取っていた。別の階段がそこに通じていたのであるが、ドイツ人がわれわれの聲を聞いたためか、偶然その途をとったのか私にはわからない。戸口に立ち留まっていた。《ゆうべはよく休めました。あなた方もよくお休みになったと思います。》そうして、にこにこしながら廣い部屋を見廻した。うちには焚木が少かったし、石炭は一層少かったので、私は臺所にペンキを塗りなおして、幾つかの家具や鍋や昔の皿をそこに移して、冬中の居間にしたのである。將校はそれをいちいちよく見た。その度に眞白な齒の先が光った。その眼は前に私が考えたように青くはなくて、金色であった。それから將校はその部屋を

通って庭に向っている扉を開けた。二た足ばかり外に出て、振返って眺めている。家は長い低い建物で葡萄の垣で覆われ、褐色の古い瓦で葺いてある。微笑がひろがった。

《老市長さんはあの館に泊れと云いました。》そう云って、手の甲で指し示したのは、葉の落ちた樹を通して、丘のやや上手に見える物々しい石造の建物であった。

《部下がまちがって連れて來たのですが、今度は褒めてやりましょう。ここの方が遙かに美しい館です。》

そう云って扉を閉め、ガラス戸越しに挨拶して出て行った。

その晩も前の晩と同じ時刻にやって來た。われわれはコーヒーを飲んでいた。ノックしたが、姪が開けるのを待っていなかった。自分で開けて云った。《御迷惑かも知れませんが。——臺所の方がよろしければ、あちらを通ります。では、この扉に鍵をおかけ下さい。》そう云って部屋を通ったが、把手に暫く手を掛けたまま、居間の隅隅を眺めなおした。しかしちょっと上體を傾けて、《お休みなさい。》と云って、出て行った。われわれは扉に鍵をかけたことはなかった。これを閉めずに置いた理由がそう明白な純粋なものかどうか、私にははっきりはわからない。暗默のうちに姪も私も

われわれの生活を些細な點に至るまで少しも變えまいときめていた。將校がいないかのように。將校が幽靈か何かのように。しかし私の心の中ではこの意志には別の感情が混ざっていたかも知れない。たとえ私の敵だとしても、一人の人に氣を惡くさせていて、自分が苦しまないわけには行かないのである。」

長い間、――一ケ月以上も――同じ場面が毎晩繰り返えされた。將校はノックして入って來る。天氣だの溫度だの、その他そういったような、どうでもいい事柄について何か物を言う。ただ共通な點は、それらの言葉が返事を豫想していないということである。將校はいつも小さな戸口のところで暫くぐずぐずする。自分のまわりを見まわす。非常に僅かな微笑が、そうやってものを見ている際に感ずるらしい喜びをあらわしていた。毎日同じ見方で、同じ喜びである。その眼は姪のうつむいたプロフィルに暫く注がれる。それはきまりきって嚴しく、感情を示さないものである。その眼が他へ轉ずる時には、そこに必ず一種の機嫌のいいほほえみを讀むことができると私は思った。そうしてお辭儀をして、《お休みなさい》と云っては出て行くのである。

それが或る晩突然に變った。外には雨のまざった細かい雪が降っていた。ひどく冷

たくて濕氣があった。私はそういう日のために取って置いた太い焚木を煖爐にくべさせた。知らず知らず私は將校が入って來る時に雪の粉をかぶって戸の外に立っている姿を浮かべていた。けれども將校は來なかった。何時も歸って來る時刻はとっくに過ぎていて、私はこの人が自分の考えを占めていることに氣附いていらいらした。姪はゆっくりと編物をしていて一心になっている樣子だった。

やっと足音が聞えて來た。しかしそれは家の內部から來る。高低のあるその響で將校の足どりだと認めた。別の戸口から入って來て、今その部屋から來ることがわかった。きっと、濡れた制服を着たまま威嚴をおとしてわれわれの前に出るのがいやなのだろう。まず着物を着かえたのだ。

足音は——一つは强く一つは弱く——階段を降りて來た。扉が開いて將校があらわれた。平服を着ている。ズボンは厚手の鼠色のフランネル、チョッキは鋼色のトゥィードで、暖かみのある褐色の糸が毛ばだっている。それは廣くたっぷりとしていて、無造作に着こんだ樣子が中々いきである。チョッキの下に着ているジャケツは晒してない粗い毛糸でその細い筋ばった胴を包んでいる。

《失禮します。寒いのです。すっかり濡れてしまいました。私の部屋も大そう冷えています。暫くあたらして下さい。》

そう云って、煖爐の前に窮屈そうにうずくまってまるくなっている。その手を度々かえしていたが、《いい氣持だ。——いい氣持だ。——》今度はぐるりと身を廻して背中を焰の方に向け、うずくまったまま腕で膝を抱いていた。

《この位はなんでもありません。フランスでは冬がいい季節です。國の方は全くひどうございます。ずっとね。樹というと樅で、森が繁っていて、その上に重い雪が積っています。ここでは樹が細い、積った雪もレースのようです。國では生きて行くのに力が要る。ずんぐりして強い牡牛を考えます。それが、ここではそれが精神とでも云いますかね。きびきびして詩的な心。》

その聲はいかにも鈍くて、響がまるでなかった。アクセントは輕くて、強い子音にだけ置かれた。全體の印象は歌の調子を帶びた蜂の羽音に似ている。

立ちあがると、丈の高い煖爐に腕を載せて、手の甲に額を載せた。丈が高かったからそれでも少し身を屈めなければならなかったが、私なら頭のてっぺんもぶつからな



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo